

有機JAS検査員が教える認定取得のここがポイント!!

⑦海外のオーガニック畜産基準

オーガニック・ランド株式会社 代表取締役 一百野 昌世



Message

現在農林水産省では、有機畜産のJAS規格が検討されています。来年にも規格が公開されるのではないかとされています。先日海外オーガニック認証機関のオーガニック畜産検査技術講習会があり参加してきましたので、海外のオーガニック畜産基準の骨子を紹介したいと思います。この基準はEU基準をベースにしたもので、この基準がそのままJAS規格

になるという訳ではありませんので誤解のないようにお願い致します。

有機畜産検討の経緯

有機畜産の基準については、これまでの主な動きとして2000年8月にEU有機畜産規則の制定、コーデックス委員会（FAO/WHO合同食品規格委員会）では2001年7月にその国際基準が採択されました。いずれも約3年の検討期間を経たものです。日本での動きは、コーデックス委員会の採択（有機畜産物に関するガイドライン）を受けた形で同年8月より農水省が（社）中央畜産会に、「有機畜産に関する検討会」を設置、7回の検討を行ない本年6月14日とりまとめ報告書が発表されました。

コーデックスガイドラインでは、有機畜産を土地と関連した活動と位置付けた上で、①野外の飼育場へのアクセス確保、②原則すべて有機飼料、③動物用医薬品の使用条件の限定、④家畜排せつ物の適切管理、⑤飼養管理記録の保存、等要件として定めています。

今後の国内での動きとしては、検討会報告を受けJAS表示基準内容の策定が進む予定です。（事務局）

	乳牛	肉牛	レイアー	ブロイラー	豚
有機転換期間	24ヶ月（一部転換期間を短縮できるケースあり）				
収容施設	適切な運動の自由と快適さを提供、新鮮な水とエサ、十分な外気と自然光、過剰な日光・温度・雨・風・湿度・風塵・有毒ガスからの保護、長期間閉じ込めたり鎖で繋ぐことの禁止、牧草地または屋外運動場・放牧場（一部屋根許容）とセット、豚・牛は最終肥育段階を屋内で過ごす（一生の20%以内、最高3ヶ月）ことは許容、殺菌剤は動物の手の届かない管理方法で許容、人口照明も一部許容				
	6.0㎡/頭	1.5～6㎡/頭	屋内6羽/㎡ 止まり木18m/羽 床面の1/3は強 固な作りに	1家畜小屋の総 使用面積は 1600㎡以下 2500羽以下	子豚 0.6㎡ 肥育豚 0.8～ 1.3㎡ 繁殖豚 2.5～ 6㎡/頭
	許容化学合成洗浄消毒資材あり				
運動区域 (生育ステージで)	4.5㎡/頭	1.1～4.5㎡/頭	4.0㎡/頭	4.0㎡/頭	0.4～8.0㎡/頭
家畜による肥料 (牧草地)	牧草地への投入量は年間窒素量として170kg/haを超えないこと (逆算により1ha当たりの放牧頭数が制限される)				
動物の福祉	繁殖の為に人工授精は許容、人口出産、介護出産の禁止、耳標等による識別管理、断尾・切歯・研磨・角のトリミング・除角は出来るだけ避ける、去勢は必要な場合認められる				
食肉処理時の 最低年齢	-	-	-	ヒヨコ 81日 肥育鶏 150日	-
飼料	量より質の生産を確保することを目指す、GMO由来は禁止、自社農場または周辺農場から有機飼料（転換中を含む）が50%以上そのうち60%は転換後の有機飼料を、草食動物は有機飼料90%その他の動物は有機飼料80%以上（2005年8月24日まで、非有機の飼料は最大1日摂取量の25%未満）、反芻動物は60%以上が新鮮な食用野菜またはミルをかけていない飼草、ヘキサミン抗生物質、抗コクシジウム剤、医療用物質、成長促進剤等の添加禁止、その他詳細の規定あり				
動物の健康	成長促進剤や予防投薬（獣医薬品、抗生物質）の禁止（法定ワクチンは許容）、病気発生後は必要に応じ隔離し治療（許容投薬あり、治療的ホルモン剤は許容）、投薬の休業期間は指定された期間の倍が必要（最低48時間）、出荷までに2年以上飼育する家畜で1度の治療の後1年間以上経過したものは有機として出荷可能、その他は非有機として出荷すること				

■動物と環境にやさしい畜産をめざして～アニマルウェルフェア■

……家畜福祉をテーマに中洞正さんが講演……

EU基準は、コーデックスガイドラインの制定に少なからぬ影響を与えています。EUの統合条約であるアムステルダム条約議定書において「畜産動物は単なる農産物ではなく、感受性のある生命存在である」と定義され、加盟各国とヨーロッパ市民は責任をもって畜産動物への畏敬とその健康、福祉の増進をはかることが義務づけられ、ここから「家畜福祉」の観点からEU基準に盛り込まれたという経緯があります。

シンポジウムでは、イギリスでファーム・アニマル・ウェル

フェアを最も先進的に取り組んでいる有機畜産農場の実践者・経営者であるチャールズ・マクリン氏、世界動物保護協会（WSPA）畜産動物福祉部門のフィリップ・リンベリー氏を招き、日本からは、家畜行動学の観点からみた動物福祉研究に長年取り組んでこられた佐藤衆介氏が、日本の畜産における家畜福祉の現状と今後の課題を講演します。結果は追ってご報告させていただきます。

日時：2002年11月30日
(土) 13時～

場所：東京大学農学部1号館
2階8番講義室
(東京都文京区本郷)

主催：ファームアニマルウェル
フェア・イニシアティブ

座長：松木洋一
(日本獣医畜産大学)

基調講演：
Philip Lymbery
(WSPA：世界動物保護協会)
Charles D. MacLean
(Sheep Drove Organic Farm)
佐藤衆介（畜産草地研究所）

日本とEUの有機畜産の比較
永松美希（日本獣医畜産大学）

放牧酪農とファームアニマル
ウェルフェア

中洞正（中洞牧場）
全農安心システムと畜産動物
の健康

原 耕造（全農）
市民から見た現代畜産におけ
る動物福祉の問題
野上ふさ子（地球生物会議
ALIVE）

連絡先：日本獣医畜産大学・
動物科学科・食料自
然管理経済学教室

E-mail Address:
myoichi@in.terlink.or.jp
(事務局・竹内)

Message